

主体的に図書館とかかわりをもつことができる生徒の育成 ～情報発信のデジタル化に向けて～

一宮市立南部中学校 坂下 弘樹

1 はじめに

学校図書館には、読書センターと学習情報センターとしての役割がある。文部科学省は、「これからの学校図書館の活用の在り方等について」で、読書センターとしての機能を、「児童生徒の創造力を培い、学習に対する興味・関心等呼び起こし、豊かな心をはぐくむ、自由な読書活動や読書指導の場である」と定義している。さらに「学校教育の一環として、すべての子どもに、本を選んで読む経験、読書に親しむきっかけを与える」「子どもたちが、自由に好きな本を選び、静かに読みふける場を提供したり、様々な本を紹介して、読書の楽しさを伝える。」と記載されている。この機能を果たすためには、児童生徒が本に親しむことができる学校図書館として環境が整っていることが前提となる。

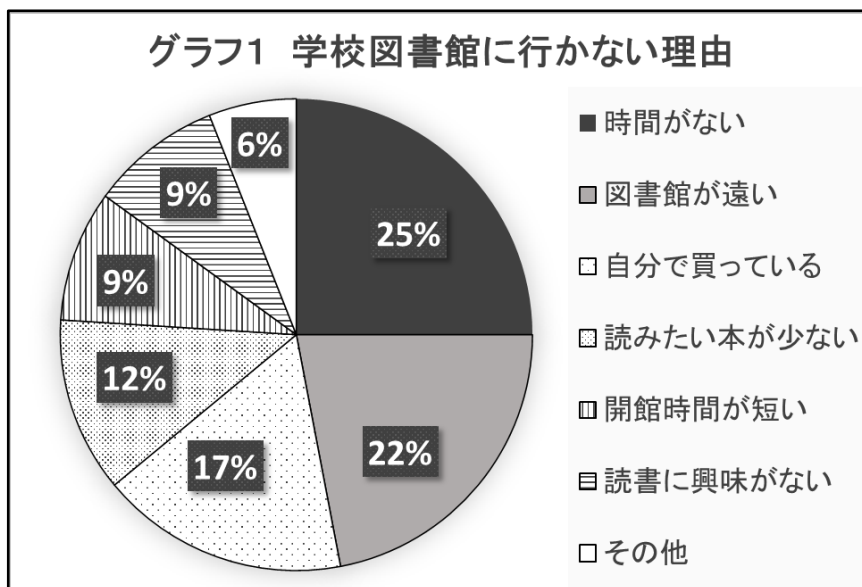
今伊勢中学校（前任校）の図書館の現状を把握するため、2020年1月に「学校図書館に関するアンケート」を、中学1・2年生（398名）を対象として実施した。その結果、「本を読むことが好きですか」という問いに対して「好き」が40%、「どちらかといえば好き」が40%であり、合計80%の生徒が読書に対して前向きな生徒が多いことがわかった。しかし、それにもかかわらず「授業以外でどれくらい学校図書館を利用していますか」という問いに対して、「ほとんど行かない」が85%であった。図書館に行かない理由は、「時間がない」で25%、次いで「図書館が遠い」が22%であった。（グラフ1）

1)

したがって、生徒が本に触れる機会を確保し、本を身近に感じることができる読書環境を作ることができれば、主体的に図書館を利用することができる考えた。

また、新型コロナウイルス感染症の流行により、私たちの生活様式は一変した。不要不急の外出を避けるようになり、それに相まって急速にIT化が進んでいる。

今後は学校図書館の情報発信や利用方法などもデジタル化が進んでいくことを予想し、以下の研究主題を設定した。



主体的に図書館とかかわりをもつことができる生徒の育成
～情報発信のデジタル化に向けて～

2 研究のねらいと手だて

(1) めざす子ども像

主体的に図書館とかかわりをもつことができる生徒

(2) 研究の仮説

研究主題に迫るために、以下のような仮説を設定して研究を進めることにした。

<仮説1>

図書館の本を身近に感じ、普段は読まない分類の本に触れるようにすれば、図書館とかかわりをもつ契機を作ることができるであろう。

<仮説2>

生徒が学校図書館の本を、図書館まで足を運ばなくても借りることができるようにすれば、主体的に図書館とかかわることができるであろう。

(3) 研究の手立て

仮説1	手立て1 学級分館の増冊 ①毎月の図書委員会の時間に、学級分館の本を10冊選ぶ。 ②学校図書館司書と相談し、教師側で選んだ5冊を学級分館に加え、合計15冊を貸し出す。
仮説2	手立て2 貸出方法の工夫 ①学校ホームページの「図書館より」のコーナーから、生徒が学校図書館の蔵書一覧を見ることができるようにする。 ②図書委員が「オンライン検索&貸出」の方法を各学級で説明する。 ③生徒は、借りたい本が決まったら、貸出申し込み票に必要事項を記入して図書委員に渡す。 ④図書委員から貸出申し込み票を受け取った教師が本の準備をし、本は担任から本人に手渡す。

3 研究実践

(1) 手立て1 学級分館の増冊

① 10冊の選書

例年、図書委員が図書館の本の中から10冊を選び、ボックスの中に入れて、各学級に持ち帰る学級分館という取り組みを行っている。(写真1) これまでは図書委員に選書を任せていたが、ほとんどの図書委員が、900番代の文学作品を多く借りていた。中には、シリーズ物のライトノベルを多く選書している図書委員もあり、図書委員の好きな本が10冊選書されている状況だった。

そこで、学級分館の本を読んで「続きが読みたい」「関連する本を読みたい」と思い、主体的に図書館とかかわりをもとうとす



写真1 貸出ボックス

る生徒が増えることをねらいとして、10冊の本の内訳を900番台の文学から5冊、900番台以外の分類から5冊とした。シリーズ物の作品は1冊までとし、普段は手に取って読まないであろう分類の本を選書させた。また、これまでは学級分館に新着図書は入れないことにしていたが、図書館を利用する時間が短いため、新着図書の貸出を認めた。

図書館利用が制限されている状況下で、図書委員は、学級の生徒が読みたい本や興味のある本を想像しながら10冊の本を選んでいった。また図書委員の中には、学級の生徒からあらかじめ本のリクエストを受けて、学級分館として借りている姿も見られた。

② 5冊の選書

図書館担当の教師が、学校図書館司書と相談し、授業内容や学校行事に関連する本を各学級5冊ずつ選んで学級分館に加えた。

授業内容に関連する本は、主に国語と社会とした。授業の進度に合わせて、国語であれば教科書の単元にある「広がる読書」を参考にし、その単元の筆者が執筆した別の作品や古典作品を選書した。また社会も授業の進度に合わせて、歴史であれば、その時代に起きた出来事や人物の本を選書した。学校行事に関連する本は、クラスマッチや体育祭、合唱コンクールに関係する本を選書した。また定期テストが近いときには学習方法に関する本を選書したり、キャリア教育に関係して、中学2年生では職場体験学習、中学3年生では進学に関する本を選書したりした。

委員会は毎月設定されているため、月に1度は学級分館の中身を入れ替えることができた。

(2) 手立て2 貸出方法の工夫

2021年2月、中学1・2年生を対象として、貸出方法の工夫を試みた。この時期に、図書館を利用するための昼休みが短い特別日課（15分から10分に短縮・清掃後の一斉手洗いの時間を含む）から通常日課（15分）に戻ったが、依然として、清掃後の一斉手洗いの時間を含んでいたため、生徒は図書館に足を運ぶ時間がなかなかとれない状況が続いていた。そこで、学校ホームページを活用し、図書館に行かなくとも本を借りることができる「オンライン検索&貸出」を実施した。

① 蔵書一覧の作成

学校ホームページの「図書館より」のコーナーから、学校図書館の蔵書一覧を見ることができるようにした。一宮市の小中学校に導入されている学校図書館システム「探調ツールデラックス」のリスト出力という機能を使い、図書館のすべての蔵書をExcelに書き出した。また、列ごとに「タイトル」「サブタイトル」「人名」「出版社」の見出しとフィルター機能

資料1 Excelのフィルター分け

	A	B	C	D
	タイトル	サブタイトル	人名	出版社
1	なぞとふしぎを遡る1	先史時代の生物	河津 千代 / 訳	リブリオ出版
2	なぞとふしぎを遡る2	ピラミッド	河津 千代 / 訳	リブリオ出版
3	なぞとふしぎを遡る3	失われた文明	河津 千代 / 訳	リブリオ出版
4	なぞとふしぎを遡る4	深淵	河津 千代 / 訳	リブリオ出版
5	なぞとふしぎを遡る5	超自然	河津 千代 / 訳	リブリオ出版
6	図書館の展示	基本とテクニック	今津 次郎 / 著	東京: 全国学校図書館協議会
7	図書館とふしぎ12か月		全国学校図書館協議会 / 編	東京: 全国学校図書館協議会
8	愛知県郷土資料分類表	利用の手引	愛知図書館協会 / 編集	名古屋: 愛知図書館協会
9	日本十進分類法 本表編	新訂9版	もり きよし / 原編	東京: 日本図書館協会
10	日本十進分類法 一般補助表・相關索引編	新訂9版	もり きよし / 原編	東京: 日本図書館協会
11	レファレンス・サービス	学校図書館メディア・プログラムのガイドライン	ワリアム A. カック / 著	東京: 全国学校図書館協議会
12	インフォメーション・パワー	アリア・スクール・ライブラリアン協会 / 共編		東京: 全国学校図書館協議会
13	探調の学校図書館	編理 信子 / 著		東京: 筑摩書房
14	探調の学校図書館	編理 信子 / 著		東京: 筑摩書房
15	学校図書館の法規・基準	全国学校図書館協議会 / 編		東京: 全国学校図書館協議会
16	学校図書館の法規・基準	深川 真吾 / (ほか) 編		東京: 第一法規
17	中学・高校の利用指導の実践	海津 高彦 / 著		東京: 全国学校図書館協議会
18	司書教諭の任務と職務	全国学校図書館協議会 / 編		東京: 全国学校図書館協議会
19	ブック・トーク	理緒と素縁	全国SILブック・トーク委員会 / 編	東京: 全国学校図書館協議会
20	子どもが生き生きする学校図書館づくり		渡辺 精恵 / 著	黎明書房
21	子どもと一緒に進める学校図書館の活動と展示・掲示12か月		渡辺 精恵 / 著	黎明書房
22	シリーズ「いま、学校図書館のやるべきこと」	豊かな教育を拓く学校図書館の役割 理想の学校図書館をめざそう	並原 良郎 / 著	ポプラ社

をつけ、検索ができるように編集した。(資料1)

② 「オンライン検索&貸出」の説明

図書委員が「オンライン検索&貸出」の方法を、図書館だよりを用いて各学級で説明をした。図書委員が説明する内容は、**ア** 図書館の蔵書一覧の見方、**イ** フィルターを使って本を検索する方法、**ウ** 借りたい本が決定してからの流れとした。またこの際に Excel のパスワードを各学級の生徒に伝え、図書館だよりにもメモをさせた。**イ**のフィルター検索の方法は、図書館だよりを用いて説明をした。

(資料2)

③ 貸出申し込み票での手続き

借りたい本が決定したら、各学級に設置されている学級分館のボックス内の貸出申し込み票に、図書のタイトルや著者名を記入させた。希望の本が貸出中の場合は、順番を待つが、貸出希望を取り消すか選択させることとした。(資料3)

貸出申し込み票を書いた生徒は、図書委員に渡し、図書委員は図書委員会担当の教師に手渡しをするか、職員室内の指定の箱に入れるようにさせた。

「オンライン検索&貸出」を始めて、2日後から貸出申し込み票が教師の手元へ来た。その中には、これまで図書館を利用したことがない生徒が利用している様子が見られた。また複数回利用する生徒もいた。

④ 本の準備と受け渡し

図書委員から貸出申し込み票を受け取ったら、教師側が本を用意し、翌日から翌々日には本人に届くように準備をした。準備した本は担任の先生から生徒に届けるように依頼した。

4 成果と課題

(1) 手立て1 学級分館の増冊

生徒が主体的に図書館とかかわりをもつ契機になったか変容を見るために、2021年3月中旬に、中学1・2年生(396名)を対象に、学校図書館アンケートを実施し、検証をした。その結果、「本を読むことが好きですか」という問いに対して「好き」が40%、「どちらかといえば好き」が39%となり、合計79%で、前回のアンケート調査と比べて大きな変化は見られなかった。また「授業以外でどれくらい学校図書館を利用していますか」という問いに対して、「ほとんど行かない」が89%であった。図書館に行かない理由として最も多かったものは「時間がない」で25%となり、次いで

資料2 図書館だよりの抜粋

ステップ2 ★本を検索してみよう★

【手順1】フィルターで検索する。

ココ!

①この小さなマークをクリック!
(タイトル・サブタイトル・人名・出版社のどれでも検索できます)

【手順2】本のタイトルやキーワードなどを入力し、OKをクリックする。

②本のタイトルやキーワードなどを入力!

③「OK」をクリック!

資料3 貸出申し込み票

貸出申し込み票

貸出受付日	貸出票	貸出日
-------	-----	-----

※ 下の太枠内を記入し、クラスの図書委員に渡してください。
後日、字綴カギに本を入れます。担任の先生を通じて本をお渡しします。

年 組 番 氏名

★図書のタイトル (シリーズ名の場合は『巻数』を忘れずに記入してください)

★図書の著者名

★A・Bのどちらかに○をつけてください。
希望の本が貸出中の場合は (A : 順番を待ちます ・ B : 貸出希望を取り消します)

※ 正確な書名や著者名がわからない場合でも、わかっていることをできるだけ詳しく記入してください。
※ 希望した本が図書館にない場合もあります。その際も改めて連絡します。
※ 貸出本の受付は先着順とします。

「図書館が遠い」が23%で、これも変化は見られなかった。

図書館までの距離を縮め、利用しやすくするために、学級分館の増冊を行ったが、効果を上げることはできなかった。教師側の働きかけが不足していたことが原因の一つである。新着図書も学級分館に入っていることや、読みたい本があれば図書委員に伝えて学級分館の中に入れてもらうこともできるということを生徒に伝えるなど、分館のよさを伝える働きかけを積極的に行っていく必要がある。その上で、さらに冊数を増やし、図書館に行かなくても魅力ある本に触れることができる環境を作り出すことも重要である。また年間を通して、様々な教科の授業で図書館を利用させる時間を設定することができなかったことも原因であると考えられる。

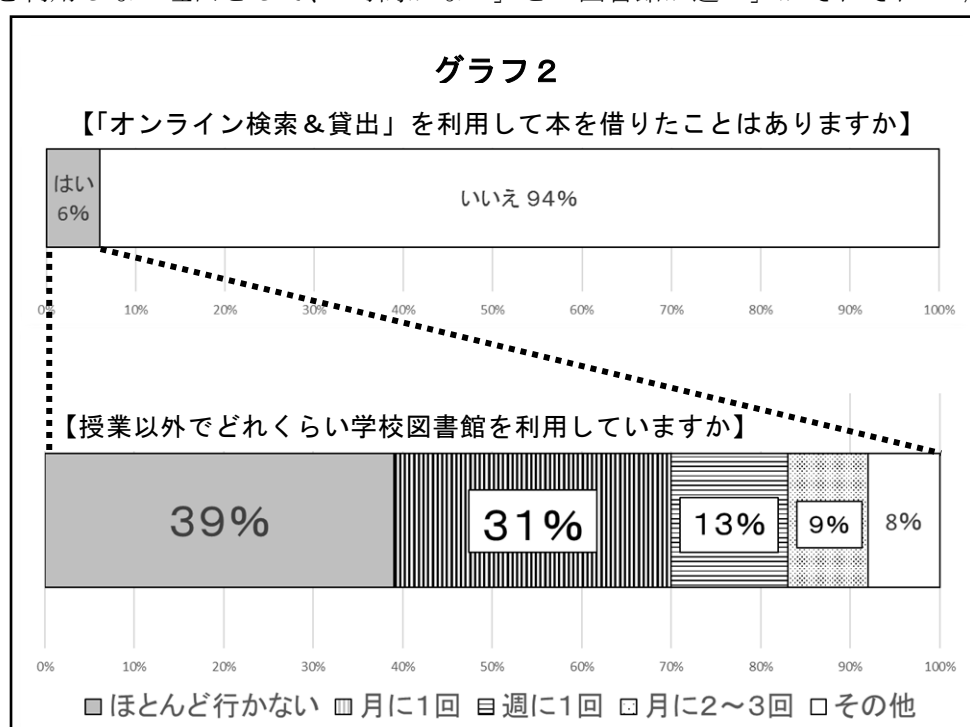
(2) 手立て2 貸出方法の工夫

2021年3月のアンケートから生徒の実態をつかむために、「オンライン検索&貸出」についての質問を追加した。

実際に「オンライン検索&貸出」を実践できたのは約1か月間で、期間としてはたいへん短くなってしまった。その中で『オンライン検索&貸出』を学校のホームページを開いて見たことがありますか」という質問に対して「はい」と答えたのは、全体の17%で、低い利用率となってしまった。しかし、アンケートを分析すると、その17%のうち、約8割の生徒は図書館の利用について「ほとんど行かない」もしくは「月に1回」と答えていることがわかった。さらに図書館を利用しない理由として、「時間がない」が28%、次いで「図書館が遠い」が27%となった。

したがって、時間がなく、図書館が遠いために、図書館をほとんど利用しない生徒が「オンライン検索&貸出」に興味をもって学校ホームページから蔵書一覧を見たことから、一定の効果があったと考えられる。

さらに、『オンライン検索&貸出』を利用して本を借りたことはありますか」という質問に対して「はい」と答えたのは、全体の6%の生徒であった。この中の約7割の生徒も同様に、図書館の利用について「ほとんど行かない」もしくは「月に1回」と答えていることがわかった。**(グラフ2)** 図書館を利用しない理由として、「時間がない」と「図書館が遠い」がそれぞれ29%となった。



したがって、図書館を利用することが難しいと感じ、ほとんど図書館を利用していない生徒が「オンライン検索&貸出」を用いて本を借りたことは、図書館利用の新たな方法の可能性を示すものであると考える。

また、実際に「オンライン検索&貸出」を利用した生徒から、「図書館が遠いから楽になった」や「このシステムなら時間があまりない人も借りられると思う」という感想があった。（資料4）

資料4 オンライン検索&貸出の感想

【感想】	すぐに本が届いたので良かったです。
【感想】	図書館に行く手間がはぶけてとても助かった。
【感想】	かりてみて、普段行くのが遠い人にとってはすごく便利だなと感じた。
【改善点】	渡すのが図書委員限定なので、自分でも渡せるようにしたり、入れる箱をもっとちがう場所にも増したら身近に利用できるような気がする。

これらの感想から、利用して初めて分かる便利さを体感させることができたと感じる。

しかし、大部分の生徒に対して、便利さを実感させることができなかったことは否めない。「オンライン検索&貸出」の全校生徒への周知は、図書委員が図書館だよりを用いて各学級で説明を行ったが、口頭説明のみであったことが原因である。説明だけでなく、実際にパソコン室から検索をしたり、貸出申し込み票を書かせたりして、手元に本が届くところまで便利さを体験させることが必要であった。

また、学校ホームページにアクセスし、蔵書一覧を開いたものの、実際に借りるまでには至らなかった生徒が11%いた。その理由として、以下のような声が見られた。（資料5）

資料5 オンライン検索の問題点

【感想】	スマートフォンでもタブレットでもパソコンでも開けなかった。
【改善点】	開けるようにしてほしい。
【感想】	名前など、本の内容がはいり分からず、いいことがあった。
【改善点】	・タブレットで見る時でも、見たい本を探せるようにしてほしい。 ・どういう話かあらすじが知りたい。

他にも「データが重い」「ジャンルが分かりにくかった」という意見があった。

現代ではパソコンのみならず、スマホやタブレット端末を活用する家庭が増えていることを加味して、どのような端末からでも蔵書一覧を閲覧できるように改善する必要がある。また貸出冊数などを調査し、人気のある図書や、新着図書のみの一覧を別に作成し、蔵書一覧を細分化することによって、データを軽くしたり、検索しやすくしたりする工夫が必要であると感じた。

「オンライン検索&貸出」については、実践期間が2021年2月から3月の1か月間と短く、生徒の中に図書館の一つの取り組みとして定着するまでに至らなかった。しかし、1か月という短期間にもかかわらず、学校ホームページにアクセスし、蔵書一覧を見ようとした生徒が17%いたということは生徒の興味・関心を十分引き付けたとも言える。今後、改善や修正を加えながら長期的に継続して取り組むことによって、定着を図り、成果をあげたい。

5 まとめ

文部科学省が学校図書館の機能を「学校教育の一環として、すべての子どもに、本を選んで読む経験、読書に親しむきっかけを与える」「子どもたちが、自由に好きな本を選び、静かに読みふける場を提供したり、様々な本を紹介して、読書の楽しさを伝える。」と提言しているように、図書館に足を運んで、本を手にとってみる体験は、絶対に欠かすことのできないものである。

しかし一方で、新型コロナウイルス感染症の流行を受けて、学校図書館は運営の仕方を変えていく必要性に迫られてきた。また、一人一台のタブレット支給などをはじめとする、GIGAスクール構想実施にともない、学校図書館の在り方も変わっていくことが予想される。これまではいかに生徒を図書館まで足を運ばせ、本に触れさせるかを考えていた。しかし、これからの学校図書館の運営は、デジタル化を進め、生徒が図書館に足を運ばなくても、図書館の情報に触れ、主体的に図書館にかかわることができるように工夫する必要がある。

今回の研究における「オンライン検索&貸出」の実践は、これまで図書館を利用していない生徒が、主体的に図書館とかわりをもつ契機となった。情報発信のデジタル化に向けて、今後も実践を継続して取り組み、改善・向上させていく必要がある。また、「オンライン検索&貸出」以外にも、図書館からの様々な情報を、学校ホームページなどを利用して発信し、図書館に対する興味・関心を高めさせることで、生徒と図書館をつなぎたいと考える。今後も、これまでのアナログな図書館利用と、これからの新しいデジタルな図書館利用を掛け合わせ、ハイブリッド型のバランスの良い図書館教育を展開し、主体的に図書館とかわりをもつことができる生徒の育成を目指していきたい。